

在日中国人留学生の適応に 関する実態と問題

徐 光 興¹⁾ 蔭 山 英 順

I. 問 題

1. 在日中国人留学生数の増加

1994年2月、文部省の調査による1993年5月1日現在の「留学生受入れの概況」が発表された。今回の調査によると、日本の大学などで学ぶ留学生数は52,405人であり、前年に比べ3,844人(7.9%)が増加しており、『留学生受入れ10万人計画』での想定より1年以上早いペースで受入れが進んでいる。留学生の出身地域別にみると、アジア地域からの留学生が48,016人(91.6%)と圧倒的に多く、そのなかでも中国からの留学生が21,801人(全体の41.6%)でトップとなっている(留学生支援企業協力推進協会, 1994)。

ここ数年来、中国からの留学生の傾向は、中国政府の北京留学サービスセンターでの相談者数のデータにみれば、1989年留学サービスセンターが受付けた相談者は約8,000人であり、その内訳は日本への留学を志願する人が2.5%を占め、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスなどの国に次いで第5位であった。しかし、1990年から1993年にかけて、日本への留学を志願する人はそれぞれ総相談者の8.3%(第3位)、9.9%(第2位)、13.5%(第2位)、10.8%(第2位)と増加している(劉翠玲, 1994)。日中両国における一水相隔の隣国という特別な地理、歴史関係からと中国の改革開放の政策のため、現在の中国は、日本が外国人留学生を誘致する最大の学生提供国になっている。

2. 中国人の日本留学の過去と現在

近代史上から見れば、中国人の日本留学の歴史は、1894年に遡ってみることが出来る。19世紀中期のアヘン戦争によって四千年以上の文明史をもつ中国が独立国家から次第に半植民地の国家へと転落していった。さらに、1894年に勃発した日清戦争に破れた中国人は、明治維新に成功した日本を建国のモデルとして、多くの中国人が日本に留学した。1906年には、在日中国人留

学生は一万人以上に達した。彼らは、日本で学問に取り組んで、後に中国の半封建、半植民地社会を打破し、中国を近代化することにおいて非常に大きな役割を果たした。しかも、近代中国の革命運動のほとんどが中国人留学生と関係している。周知のように、孫文(中国民主主義革命の先駆者)、陳独秀、李大釗(中国共産党の創立者)、周恩来(中華人民共和国の首相)、蒋介石(国民党政府の大統領)などの人物は日本留学生である。また、国民党の前身の「同盟会」は、1905年に日本留学生のメンバーによって結成された。さらに、中国の新文化運動、新文学の成立なども密接に日本留学生と関わっている。日本留学の魯迅、郭沫若がその代表的な人物である。

現代では、新中国の成立(1949年)以降、中国政府は、ソ連、東欧諸国への留学生の派遣を始めた。その後は、かなり幅広く実施されており、派遣開始の1950年から1966年の間において、29か国にわたり、政府派遣留学生の総数は10,678人に及んだという(石附実, 1989)。しかし、1966年6月、「文化大革命」の動乱が始まり、留学派遣を含むすべての対外教育交流は停止した。

「文革」が始まってから5年ほど経った1972年に、中国はユネスコに加盟し、国際的な教育文化交流も再開された。そして、72年末には、再び外国への留学生の派遣が行われることとなった。その後の日本留学の歴史は四つの段階に区分することができる。

第一段階は72-77年の期間である。この期間は米中、日中、西側との関係の回復によって、日本を含む西側各国への留学生の派遣を始め、その総数は997名だったという。第二段階は78-83年の期間である。この期間は、中国は「改革、開放」の時代に入り、留学生の外国への派遣をさらに進めるが、日本への留学生の数はまだ少なく、かつ政府派遣に限られたことに特徴がある。1978年に日本に派遣した国費中国人留学生はわずか9名にすぎなかった。

第三段階は84-87年の期間である。84年12月になる

1) 名古屋大学大学院発達臨床学専攻博士課程(後期課程)

と、中国国務院（政府）は「私費留学生に関する新規定」を公布した。それによれば、個人は正当かつ合法的な方法を通じて、外貨の援助あるいは海外の奨学金を獲得し、「入学許可書」をもっている者であれば、学歴、年齢および勤務年数などの制限なしに、だれもが外国への留学を申請できる、としている。これによって、外国および日本への私費留学の道を大きく開いたといえる。

第四段階は88年から現在までであり、中国においてかつてない私費留学ブームが一気に展開していった。現代中国の知識人にとって、留学が人生の必修科目となるほど大切なこととなっている。この期間の特徴は、留学の形態が多様化し、その規模が極めて大きくなったということである。たとえば、1991年末現在、在日就学生（日本語学校の在籍学生）は24,251人で、それに専門学校、短大を含む学部レベルおよび大学院レベル留学生を付け加えれば、在日中国人学生の総数は43,876人に達した。この数はすでに清朝の末期から第二次世界大戦の終戦までの中国人留学生の総数を越えた。また、92年現在、すでに約7,000人（約36%）の日本留学生が帰国した。他の国（アメリカから帰国した中国人留学生の率は約19%である）と比べて日本留学生の帰国率はかなり高いといえる。

3. 研究の目的

留学生の生活および異文化適応の研究は、近年の国際教育交流のなかで非常に高い関心を集めている研究領域の一つである。日本におけるおよそ90%以上のアジア系留学生に関する実態と問題は一般社会の注目を集めつつあるが、アジア地域からの出身国別留学生に対する組織的な研究は、日本ではほとんど行われていないのが現状である。これまでの留学生に対する一般的な総合的研究を通じて、在日留学生の全体傾向などを描き出すことはできてはいるが、それぞれの出身国別の留学生の生きた姿と属性別の違いなどの具体的および個別的なスケッチは、なかなか浮かび上がってきていない。そこで本研究では、中国人留学生を対象に、彼らの日本生活、文化適応過程に関する実態と問題を心理学的に検討し、序報とすることを目的としている。

II. 在日中国人留学生の実態と問題

—「留学生新聞」アンケートの分析を中心に—

現段階で、全日本の中国人留学生の実態に関する調査データは、在日中国人留学生自身で刊行されている中国語情報月刊『留学生新聞』のアンケート調査のデータ以外に見られない。中国人『留学生新聞』は、1990年7月と1992年1月の二度のアンケート調査に続いて、94年2月号から6月号にかけて第三回目アンケート調査の

結果を発表している。調査内容は、個人の在日生活の形態と経済状況から精神の奥深くに秘められた喜びや苦悩、そして日本人に対する評価、日本生活の適応状況、および中国の政局、「天安門事件」の評価、中国と台湾の関係などの政治的立場まで、質問事項は広範囲にわたっている。ただし、このアンケート調査の回答者の身分には、留学生以外、就学生や経営、就職者および日本人と結婚した留学生、研修や訪問学者、中国残留孤児とその家族、そして不法滞在者に至るまであらゆる人たちがいる。しかし、本研究のような一般的な異文化適応の研究分析を試みる上では、大きな支障はないと考えられる。

1. 調査対象の属性

1994年の中国人情報月刊『留学生新聞』のアンケート調査の締切り日までに、全日本の合計656人の中国人の回答が寄せられた。まず、調査対象の属性とその背景は次に示すとおりである。

(1) 年齢と性別の構成

年齢構成は、20-24歳の人が68名（10.4%）、25-29歳の人が132名（20.1%）、30-34歳の人が239名（36.4%）、35-39歳の人が117名（17.8%）、その他の年齢層の人が78名（11.9%）、未回答者が22名（3.4%）であった。その中で30-39歳の人がもっとも多く、第一位となっていた。全体の年齢階層はやや高い。その原因は、30-39歳の人々は中国の「改革・開放」の時代に入り、国家私費留学政策を公布した近年に、すでに成年期を迎えたことに関係しているからである。すなわち、中国人留学生の留学年齢層の変化と近年の中国の留学政策の変動との間には深い関係がある。

性別の構成をみると、女性が235人（35.8%）、男性が408人（62.2%）で、未回答者が13人（2.0%）を除いて、女性より男性の方が圧倒的に多い。

(2) 出身地

被調査者の出身地をみると、台湾を含む現行の31省、自治区、直轄市のなかで27省、直轄市、自治区が挙げられている。この分布状況はかなり広範であるが、その人数の多寡に大きな差異がある。その中で第一位が上海市の252人（38.4%）を占め、北京市が第二位で103人（15.7%）、第三位が福建省で56人（8.5%）である。これは、上位の各省、市が古くから文化の発達した地域であるという理由の他に、中国の沿海地域で経済開放と留学の伝統をもつ要因からでもある。一方、中国の内陸省、市、自治区から来日した人数が意外に少ない。さらに、少数民族地域で例えばチベット、新疆维吾尔自治区や寧夏回族自治区などでは一人もいない。なお、台湾からの留学生は15人（2.3%）である。

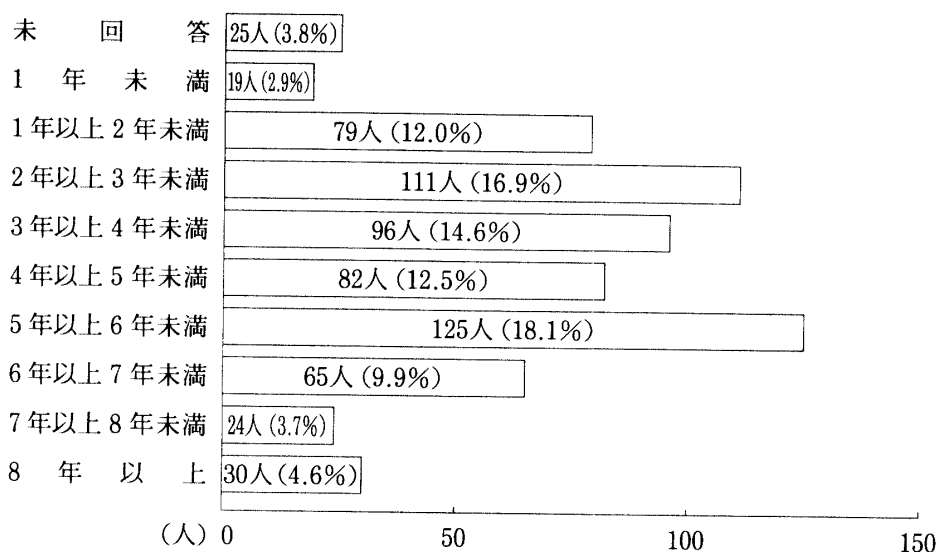


図1 被調査者の日本滞在年数（『留学生新聞』1994年2月第63号より）

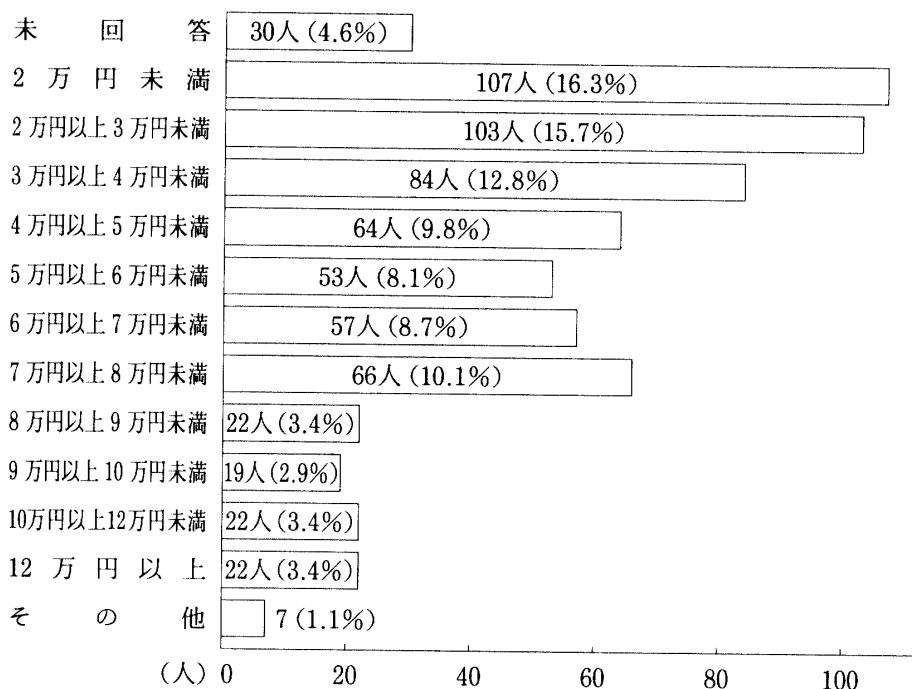


図2 被調査者の毎月の住居費（人、百分率）（『留学生新聞』1994年3月第64号より）

(3) 日本滞在年数と現在の在留資格

図1によれば、被調査者の日本滞在年数のなかで第一位を占めているのは、5-6年の人で125人（19.1%）、第二位が2-3年で111人（16.9%）となっている。この原因は、5、6年前、日中両国は同時に中国人の私費留学の道を大きく開いて、その「出国ブーム」が最高潮のころ、中国の学生、知識人が日本に殺到したことによる。これは、今回の調査ではっきりとしていた。

しかしながら、以上のデータは、留学生の年齢と滞在年数が比例することを表すものではない。その原因は、まず、中国の「改革・開放」政策と私費留学の道を大き

く開いたことによる中国人留学生の留学年齢層の幅が広がって、年齢が高い人は必ず日本滞在年数の長いことではない。第二に、留学生にしろ、就学生にしろ、一生学生であることではなく、2、3年して学校を卒業し、さらに日本に滞在したいと考えるとき、ある人は就職し、ある人は国際結婚し、またある人はまず国際結婚若しくは就職したあと留学生になったケースもあるからである。

彼らの現在の在留資格は、専門学校生が31人（4.7%）、短期大学などを含む大学部生が79人（12.1%）、大学院研究生が29人（4.9%）、大学院修士課程および博士課程の院生が64人（9.8%）、日本語学校就学生が35人（5.3

%), 日本の大学を卒業して在日企業就職の者が149人(22.7%)である。その他の269人(41.0%)は訪問学者、客員教授、研修生、日本人と結婚した留学生や就学生、留学生の家族などとなっている。

(4) 経済状況 — 毎月の住居費の支出を中心に —

近年、日本は「バブル経済」崩壊の後、不景気が続いており、個人から企業に至るまで多かれ少なかれその影響を受けている。日本で生活している中国人留学生はどうだろうか?彼らは日本経済の不景気、円高などの影響を受けているだろうか?代表的な経済状況の指標として考えられる図2の毎月の住居費の支出を見て分かるように、被調査者は、約45%の人たちが4万円以下のアパートに住んでいる。東京あるいは京阪神圏の大都市における4万円以下のアパートでは、無論浴室などの設備はない。しかし、住居費の支出を減らし、急激な円高や大学などの入学受験料および毎月の授業料が値上がりに対応するために、やむをえないことなので、「どうせ数年のことだ」から我慢しようといった生活観を持つ中国人が多いようである。一方、図2の5-8万円の住居には留学生夫婦および子どもと一緒に住んでいる中国人は多い。12万円以上のマンションに住んでいる者もあるが、その人たちの多くは、在日企業就職の留学生出身者などである。

2. 日本生活への適応状況

(1) 在日生活の形態

まず、被調査者の中で半数近く321人(48.9%)が夫婦揃って日本で生活している。この場合は、まず夫婦のどちらかが先に日本に来て、生活がやや安定した後、もう一方を呼び寄せるという形が一般的である。調査の結果から、夫婦と一緒に生活すれば、精神的寂しさや孤独感を感じないし、支出を抑えることも分かっている。第二位は日本に一人で生活している人たちである。その中に未婚で恋人もいない人が138人(21.1%)を占め、未婚で中国に恋人がいる人が33人(5.0%)、既婚で夫婦の片方が日本にいる人が77人(11.7%)となっている。以上の単身の三者を合計すると、248人(37.8%)であった。第三位は、一人で恋人が日本にいる人は56人(8.5%)で、この中には、すでに結婚が決まったがまだ正式な手続きをしていない「婚約者」、また、まだ結婚は意識せず、単に交際中の「恋人」も含まれている。その他と未回答者は31人(4.7%)である。

以上の第二位の人たちは異国で「孤軍奮闘」している人といえ、精神的プレッシャーと悩みは免れない。「悩み」とは、主に今後の結婚、家庭問題を指している。次にそうした三つの事例の訴えを挙げてみよう。

事例1. 女性 32歳 日本企業で就職している留学生

「私はハイミスですが、生活はすでに安定していいです。ただ結婚の問題だけが頭痛の種です。『留学生新聞』には日本の男性に中国人女性を紹介する結婚あっせん業者の広告がいつも出ていますが、日本人に嫁ぎたくない中国人女性も大勢いることを忘れてください」

事例2. 男性 32歳

「私には恋人がいましたが、彼女は密かに去っていき、日本人と結婚してしまいました。お金があれば結婚相手さえ手に入るのだ」

事例3. 男性 28歳

「独身男性として、性的欲求が満たされない。しかし相手がだれでもいいというわけではない」

中国では「男大当婚、女大当嫁」(男女は成人になると結婚すべきだ)という伝統的な文化価値観があるが、その文化価値観に反する者はしばしば社会的に周囲の人々のプレッシャーを受けている。上記の三つの事例では、共通の悩みとして日本における現在の奮闘と将来の結婚の問題において葛藤している。彼らは心理相談とカウンセリングがもっとも必要となっている人たちといえるであろう。

(2) 日本生活での一番楽しいことと悩み

表1~2 (日本生活で一番楽しいことと一番悩みなこ

表1 日本生活で一番楽しいこと

順位	内 容	人数	%
1	家でくつろぐ、休憩する(テレビを見たり、音楽を聞いたり、読書をしたり、眠ったり、自分がしたいことをする)	104	13.6
2	学業、事業の成功あるいは順調	89	11.6
3	家族と団らんする	77	9.9
4	友達とのつきあい、おしゃべりすること	76	9.9
5	思いのままにふるまう、自由で圧力なし	76	9.9
6	旅行する	56	7.3
7	読書(中国語の出版物)	52	6.8
8	預貯金を増やす	36	4.9
9	母国の発展、進歩	21	2.7
10	帰国し親族を訪問する	19	2.5
11	国際交流活動を行う	12	1.6
12	競馬、マージャン、パチンコ	11	1.4
13	ショッピング	10	1.3
14	宗教と信仰活動	7	0.9
	その他	21	2.7
	楽しいことがなし	55	7.2
	未回答	46	5.9

(『留学生新聞』1994年4月65号より著者作製)

表2 日本生活での一番の悩みごと

順位	内 容	人数	%
1	孤独で退屈	89	12.5
2	将来に対する不安	81	11.5
3	経済問題	74	10.4
4	理想と現実との矛盾	53	7.4
5	帰国するか日本に残るかの問題	50	7.0
6	環境適応の問題	45	6.3
7	仕事やアルバイトの問題	35	4.9
8	進学、就職の問題	33	4.4
9	言葉の問題	29	4.1
10	結婚問題	26	3.7
11	子どもの教育問題	22	3.1
12	在留ビザ問題	19	2.9
13	自己実現が難しい	16	2.3
14	生理的、心理的プレッシャー	14	2.0
15	健康問題	12	1.7
	その他	41	5.1
	悩みごとがなし	23	3.2
	未回答	50	7.0

(『留学生新聞』1994年4月第65号より著者作製)

と)を見ると、回答は広範囲にわたっている。楽しいことでは回答の多い順に見てみると、休みの日が一番楽しく、家族との団らんや友達との交流したり、旅行をしたり、読書をしたり、外部から干渉されることもなく、自分の生活ができるという「自由」を満喫することなどである。もちろん日本における留学の学業、事業成功につれて喜びなどの心情があげられている。この原因は、中国大陸出身の留学生は皆、思想や生活を「干渉」された不自由な経験があるがゆえに、現在の日本生活の「自由」の価値と喜びを大きく感じているからであろう。

しかしながら、「自由気ままで、何の圧力もない」という楽しい反面、必然的に「誰もかまってくれない孤独感」という苦痛に耐えねばならないこともある。第一位の悩みでは「孤独で退屈」の問題である。そのなかに38%近く人たち(すなわち、前述の未婚で恋人もいない人、あるいは恋人が中国国内にいる人および既婚で夫婦の片方が日本にいる人たち)は「孤軍奮闘」していると同時に、その孤独と寂しさをを感じていることが分かる。「一番の悩み」の第二位は「将来に対する不安」であり、その「不安」の内容は、主に今後の進路をどう選べばいいのか、留学の実力をどう発揮していくのか、収入がなく、お金がなく、続けて進学するかまたは就職するか、そして在留ビザ、身分など自分の将来がはっきり展望できない、および結婚、家庭問題にも絡んでいることが現われた。さらに、在日中国人留学生の個別的な悩みをみるために、代表的な事例をまとめて表3に示した。

表3 在日中国人留学生の主な悩みと不安についての事例

番号	年齢	性別	身 分	主 訴
1	34	男	大学院修士課程	自分を見失った(文化的な沙漠の中で)
2	26	女	大学院修士課程	結婚が恐ろしい(結婚したくない)
3	27	女	大学院研究生	交際したり、商談中でも「セクハラ」の危険がある。
4	43	男	大学学部生	持っている日本の株が値下がりした。
5	26	女	大学院研究生	この国が好きではないのに、この国に住まなくてはならない。
6	26	男	大学院研究生	中国人と見ると外国人差別を受けるのが一番の悩み。
7	24	男	大学学部生	病気になるのが怖い、病気になっても、そばにいてくれる身内がないから。
8	28	男	大学学部生	先生が厳しすぎる。
9	38	女	専門学校生	将来が分からない、再婚したいけど、どうすればいいか分からない。
10	35	男	大学学部生	目標がない。
11	21	女	大学学部生	時には自分を見失い、何を求めるのか分からなくなる。
12	20	男	専門学校生	留学するために、騙し取られた80万円をどうやって取り返すか。
13	28	男	専門学校生	(仕事)解雇の危機に直面している。
14	21	男	日本語学校生	進学するか不法滞在になるか。

表4 日本人に対する中国人留学生の評価

順位	長 所	人数	%	短 所	人数	%
1	勤勉, 仕事熱心, 責任感がある	419	45.4	オモテとウラが違う偽りが多い	228	25.8
2	礼儀正しい	67	7.3	排他的, アジア蔑視的, 西洋崇拜	102	11.5
3	ルールや秩序をよく守る	58	6.3	島国根性的, 心が狭い	65	7.4
4	清潔で公德心がある	53	5.7	傲慢, 優越感を持っている	39	4.4
5	誠実, 正直, 着実	50	5.4	表現があいまい	38	4.3
6	団結心, 協力的, 集団主義	42	4.6	保守的, 紋切り型, 頑固	37	4.2
7	研究・教育文化の重視	32	3.5	正義感がない, 利己的	31	3.5

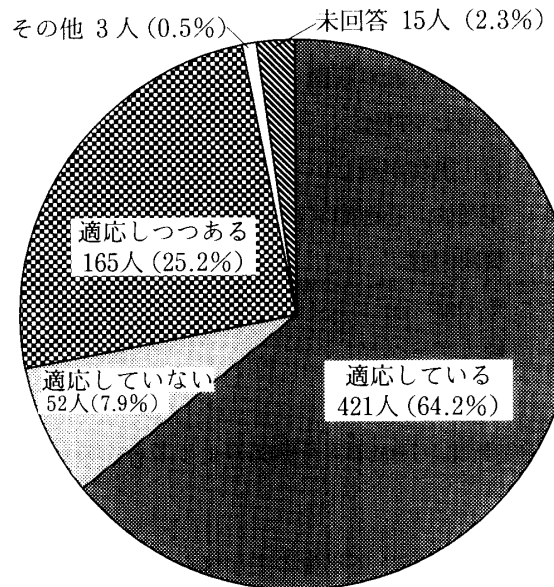
(『留学生新聞』1994年4月1日第65号より著者作製)

(3) 日本人に対する評価と日本生活の適応

日本に来て留学生活し、日本社会と日本人と深くつき合うようになった中国人は、日本人をどう評価しているだろうか？もちろん、外国人にしてみれば、日本人の特徴を理解することは確かに難しいが、中国人情報月刊「留学生新聞」のアンケート調査は、日本人の優れた点と欠点を各々一点にしぼって、回答を求めた。表4では、中国人留学生の答えの多い順に七位まで、日本人の優れた点（長所）と短所の二つの評価をまとめて、示したものである。

表4を見れば分かるように、答えは非常に集中している。すなわち、日本人が勤勉、真面目、仕事に関しては誰もが称賛しているが、評価は一点に誠実さと偽りを併せ持ち、裏表があると認知している。ここで単純に、日本人を論じることは難しいことのようなのである。ある留學生は、「この答えは矛盾しているが、この点こそ、外国人が日本人を理解することが難しいと感じる点である」と書き、さらに「矛盾しているようだが、事実なのだ」と付け加えている。表4の日本人の長所と短所の二つの評価を対照させると、多くの日本人自身の矛盾が発見できる。しかし、よく考えれば、どの個人、どの民族にも自己の二重性、三重性や矛盾はあるのではないだろうか？

最後に、「日本の生活に適応しているか」という質問に対して、421名(64.2%)の人が「もう、適応した」と答え、165名(25.2%)の人が「適応しつつある」で、52名(7.9%)の人が「適応していない」と答えた。第一位の日本の生活にすでに適応している人達と第二位の適応しつつある人達が大多数(89.3%)を占めている。彼らは日本の生活に適応するにつれて、日本の社会に対する違和感も減り、生活も次第に安定してきている。ここで注意を要することは適応していない7.9%の人達に対する援助である適切なカウンセリングと心理相談を早急に行うことが必要となっているといえよう。(図3)



(『留学生新聞』1994年4月1日第65号より)

図3 在日中国人留学生の日本生活への適応状況

III. 中国人留学生の適応問題に対する分析と提言

現在、日本で勉強している中国人留学生数は在日の各国留学生数の首位を占め、彼らの日本における留学生活ではさまざまな不安や要望が多く出されている。また、日本における留学生の受入れにあたって制度上の問題点そのものも少なくない。とくに、私費留学生の激増によるさまざまな新しい問題も生じている。たとえば、在留ビザ申請の問題、アルバイトの問題、そして何よりも円高と物価高の日本で生活する経済的な問題など、彼らはきびしい状況に追い込まれている。多くの留学生たちは、学費や生活費のためのアルバイトで疲労こんぱいしている。このままでは帰国して日本と関係深い仕事についても、日本で体験した辛さで一生涯日本に良い印象を持

つことを困難にしているといえる。改善の策を考えると、日本側としては、官民協力によって、より柔軟な形による経済的な助成の態勢を拡げ、文部省をはじめとする関係機関、大学、地方自治体、留学生支援推進協会の企業あるいは民間団体など、国を挙げての施策や支援を強力に進めていく必要がある。本研究では、留学生の問題点と現状を明確にし、改善のために提言の形で取り上げ、提言の実施に必要な経済措置や制度の設けが講ぜられ、今後の留学生対策の充実向上が図られることを期待したのである。

まず、中国留学生問題について歴史的視点とグローバル化の対応が必要と思われる。

歴史的にみれば、「留日」（日本の留学）の歴史はまさに「反日」製造の歴史でもあった。日本は明治維新以降、アジア、アフリカつまりヨーロッパ以外の国で唯一、先進国の仲間に入った国である。そこで日本に学ぼうとして、一番熱心なのは、中国からの留学生が多くやってきた。ところが、その後、日本のアジア政策のため、かなりの人たちが「反日」になったのである。中には後に中国の社会で重要な指導者の地位に就いた人もいる。とにかく、最初は日本に学び、日本のような近代化を考えた人たちが、「反日」という逆の方向に行ってしまった。現在の日中関係を見ても日本側の受入れ体制のいかによって「留日」が依然として「反日」を生み出す恐れがあるかもしれない。そのため、より多くの日本人には留学生の受入れを国際理解、国際協調に資するという角度から理解する必要があり、日中両国が長期的な友好関係の樹立、強化のための基礎となることを期待すべきであろう。「世界の発展途上国に貢献する日本」というグローバルな発想も必要であろう。

第二に、在日留学生に対する人材意識である。

アジア諸国の協力関係を考えるとき、留学生が日本に来ることは、日本にとってマイナスではなく、世界に貢献し、尊敬される日本になっていくために、大変よい条件を提供しているという見方が必要だと思う。すなわち、現在の日本にいる留学生の中から21世紀において政府や社会の指導の立場に立つ人間が出る可能性があるという認識が必要である。現在の中国の多様な分野で活躍しているリーダー若しくはエリートには、元留学生が多い。とくに、日本に留学した人たちの中から政治家、経済家と文学家など多くの人材が輩出されたのである。一方、彼らは日中友好のかけ橋とも言える。長い目で見れば、日本で中国人留学生を育成したことは、中国の現代化建設のために重要な人材を育成していると同時に、日中友好の人材をも育成していることになるとと思われる。過去の歴史を参照して顧みれば、21世紀の中国の重要な

指導者が現在の日本で学ぶ中国人留学生や研究生の中に隠れている。彼らを日本の社会がどれだけ温かく迎えるか、これが将来の日中関係を左右するともいえるだろう。経済的な援助ばかりでなく、どんな気持ちを持って、どのような人材意識で日本人が中国人留学生に接しているかも重要である。

第三に、在日留学生の適応研究には、まだ歴史が浅く、さまざまな課題が残されており、現状の調査と研究の積み重ねが必要である。留学生の文化適応の研究手法としては、縦断的な方法（同じ留学生をある期間において何度か調査する手法）と横断的な方法（大勢の留学生を一度に調査し、滞日期間に分けて調査する手法）がある（高井次郎、1989）。しかし、既存の諸研究を比較すれば、いくつか不十分な点が見られる。主な問題は、各国留学生の文化的距離（Cultural distance）と日本適応の特徴にまだ目が向けられていないことである。特に彼らの異文化適応を心理的な「過程」としての重要性が軽視されやすいことである。今後の研究には、各国留学生の文化脈絡と価値観に焦点をおくべきであろう。

第四に、留学生のカウンセリングについて中国人『留学生新聞』の調査によれば、日本における外国人留学生の全体的な学習、生活上のあり方に比べて、おおむね中国人留学生はその修学生活と文化適応がうまくいっていると見ることができよう。しかし、現実的問題には、言語問題、修学問題、経済的問題よりも人間関係、文化的、心理的適応問題の方が比較的多かった。しかしながら、在日留学生は文化的、心理的適応問題を解決するための異文化間カウンセリングに対する抵抗感がみられ（松原達哉・石隈利紀、1993）、中国人留学生も同じ傾向が見られるともいえる。彼らは同国からの留学生あるいは自分で問題の解決をはかろうとする傾向が強いゆえに、援助の方法については十分な検討が必要である。

日本人カウンセラーやアドバイザーにとって、留学生の心理状況を留学生の文化的背景のなかで理解したうえで、留学生を援助すること、すなわち、異文化間カウンセリングの実践は大変な困難性がある。ここで、大学など専門機関の専任のカウンセラーまたはアドバイザーは、留学生に対する関心をもつだけではなく、異文化間心理臨床と海外事情に関する知識と経験が豊かにし、熱心に相談活動を実践する人たちであることが望まれる。また、留学生は自分で問題を解決するために同国から来た留学生に相談する傾向が強いために、各大学の学生相談室で留学生の中からカウンセラーを養成する視点も必要であろう。留学生カウンセラーはその国のソーシャル・ネットワークを充分持ち、それを通して援助のルートに乗せる方法を提言したいのである。

第五に、在日中国人留学生の問題は、その解決は留学生自身の努力にかかっているとみえる。そのために中国人留学生は日本の社会に溶け込み、「日本通」（日本のいろんな事情を良く理解する）になる努力を続ける必要がある。留学は単なる知識、技術的の伝習にとどまらず、広い意味での異文化学習としての実を上げるためにも、学校や留学の場などの壁を越えて、日本における日常的な生活を通して、異文化としての日本との触れ合いの機会と中身を豊かにするというを常に考えていく必要がある。

文 献

- 留学生支援企業協力推進協会（編）1994 Friendship Network June Vol.35
『留学生新聞』1994 在日華人の実態録（読者アンケート報告・その一）2月 第63号
『留学生新聞』1994 在日華人経済状況の真実顕現（読者アンケート報告・その二）3月第64号
『留学生新聞』1994 在日華人精神生活的真実写照（読者アンケート報告・その三）4月第65号
劉 翠玲 1994 中国人学生の日本への留学について（財）日本国際教育協会 『留学交流』2月号 6-7
張 紀濤 1993 歴史にみる中国人留学生（財）法務省入国管理局協会 『国際人流』10月1日号 22-2
- 3
松原達哉・石隈利紀 1993 外国人留学生相談の実態『カウンセリング研究』第26号 50-59
陳 西梅・坂西友秀 1992 中国人留学生の日本語学習における困難 埼玉大学教育学部紀要 第41巻第1号 37-46
山崎瑞紀 1993 アジア留学生の対日態度の形成要因に関する研究 『心理学研究』第64号第3号 215-223
石附 実 1989 中国人留学生の問題（『日本の対外教育—国際化と留学生教育』）105-153 東信堂
岩男寿美子・萩原 滋 1988 日本社会への適応（『日本で学ぶ留学—社会心理学的分析—』）139-168 勁草書房
高井次郎 1989 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要 第36巻 139-147
江淵一公（編）1990 留学生受入れと大学の国際化（『高等教育研究叢書』）広島大学教育研究センター 筑波大学留学生センター相談室 1992 筑波大学における留学生の適応に関する研究平成3年度研究報告書
白土 悟 1986 留学生適応の諸問題 『教育と医学』第34巻10号 慶應通信
Joe E. Hicks 1987 日本における留学生政策と留学生の適応に関する諸問題 『帰国子女・留学生の適応教育に関する調査研究報告書』名古屋大学教育学部 27-35

(1994年9月14日 受稿)

ABSTRACT

Adjustment Problems and Realities of Chinese Students' Life in Japan

Guangxing XU and Hidenori KAGEYAMA

Many studies have been conducted on adjustment problems of foreign students in Japan but none of them were targeted to examine a specific country to grasp its culture-specific views. The purpose of this paper is to research Chinese students on their cross-cultural adjustment issues in Japan. Using the results of survey which was conducted by Foreign Students Newspaper (February 1, 1994 – April 1, 1994), We will examine how multiple factors are related to the psychological well-being of Chinese students.

From this research, we can portray Chinese students to the following sketch: (1) They feel that they are generally well adjusted to life in Japan (89.3%). (2) Their top-three concerns and problems are loneliness, future, and finance. (3) They hold contradicted views toward the attitude of Japanese. This research also points out the need of counselors and counseling offices in college and university settings where Chinese students can seek help. It will be useful to keep these point in minds when investigating farther on cultural adjustment problems for Chinese students who are staying in Japan.

Key Words: Adjustment, Cross-Cultural, Chinese Students Counseling.